

# 農業技術情報

令和3年7月15日

池田町農業構造政策推進協議会

十勝農業改良普及センター

十勝東部支所 015-572-3128

J A 十勝池田町 572-3131

高島支所 573-2111

池田町産業振興課 572-3118

農作物の生育・作業の状況（池田町 7月15日）（ ）内は平年値、

作物名	遅速 日数	生育状況		農作業状況
秋まき小麦	±0	稈長 74.4 (74.4)cm 穂長 9.0 (8.8)cm 穂数 864 (662)本/m <sup>2</sup>		
馬鈴しょ(メークイン)	+4	茎長 77.5 (81.1)cm 茎数 3.8 (3.3)本		
馬鈴しょ(男爵)	-	茎長 49.3 (-)cm 茎数 3.4 (-)本		
てん菜(移植)	+4	草丈 56.0 (54.1)cm 葉数 30.8 (20.0)枚 根周 26.2 (23.7)cm		
てん菜(直播)	+2	草丈 52.2 (48.5)cm 葉数 17.7 (17.6)枚 根周 18.2 (17.1)cm		
大豆	+3	草丈 45.4 (40.1)cm 葉数 7.4 (6.2)枚	開花始 7/16(7/19)	
小豆	+1	草丈 15.9 (13.3)cm 葉数 5.4 (5.0)枚		
菜豆(金時)	+2	草丈 32.5 (33.4)cm 葉数 3.6 (3.8)枚	開花期 7/13(7/15)	
菜豆(福勝)	-	草丈 45.2 (-)cm 葉数 4.0 (-)枚	開花期 7/13(7/17)	
菜豆(手亡)	+1	草丈 52.8 (29.2)cm 葉数 6.4 (5.9)枚	開花始 7/16(7/17)	
牧草	+2	草丈 二番草 30.1 (27.5)cm		収穫終 7/14(7/15)
サイレージ用 とうもろこし	+3	草丈 162.7 (149.3)cm 出葉数 14.3 (13.7)枚		
直播たまねぎ	-	草丈 61.7 (-)cm 生葉数 7.7 (-)枚 葉鞘茎 14.8 (-)mm 球径 31.2 (-)mm		

# 1 小麦

## (1) 収穫前の管理

### ア 赤かび病の防除

秋まき小麦「きたほなみ」の生育は平年並です。収穫前日数に注意して防除を行いましょう。今後の天候で急速に仕上がる可能性もあるので早めに収穫準備を済ませておきましょう。

表1 赤かび病の防除薬剤

防除時期	薬剤名	系統名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	回数 (以内)
4回目	チルト乳剤 25	DMI	1,000~2,000	3日	3回(春期以降)

※チルト乳剤は他作物に薬害が生じる可能性があるため飛散に注意。

### イ 収穫作業に向けて

- ・コンバインによる収穫作業がスムーズに行えるよう、ほ場周辺の枝払いや草刈りを実施しましょう。
- ・ほ場内に雑草が繁茂している場合、倒伏の助長、他ほ場への種子の持ち込み等が懸念されるため、株ごと抜き取り、ほ場外へ持ち出しましょう。
- ・倒伏した小麦は低アミロや細麦となりやすいため、品質向上のために収穫時に正常な麦と混ぜないように努めましょう。

## (2) 収穫後のほ場管理

### ア 麦稈の処理

- ① 収穫後の麦稈は速やかに搬出しましょう。
- ② 特に、立枯病や条斑病など土壌病害が発生したほ場では、病気のまん延を防ぐため、麦稈をすき込まずに持ち出し、堆肥化しましょう。また、2~3年は麦の作付けを避けましょう。
- ③ 麦稈をすき込む場合は、窒素流亡による環境負荷を低減するため、後作に作物や緑肥を栽培する場合を除き、窒素肥料の施用を避けましょう。

# 2 ばれいしょ

本年は、茎長は平年並で倒伏の発生も少ない状況です。しかし、高温多湿になると軟腐病の被害も懸念されますので、ほ場観察に基づき適正な防除を実施して下さい。

## (1) 疫病の防除

表2 疫病の防除薬剤例

薬剤名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	成分または 系統名※1	浸透移行性	効果の 発現	対象病害(倍)		
							夏疫病	菌核病	塊茎腐敗
リライアブル フロアブル	800~ 1,000	7日	3回	ベンズアミド カーバメート	○ ○	予防 治療	—	—	800~ 1,000
ホライズン DF	1,000 ~ 2,500	14日	4回	QoI シモキサニル	● ○	予防 治療	1,500	—	—

ブリザード水和剤	800～1,500	7日	4回	シモキサニル TPN	○ ×	予防治療	800	—	—
ダイナモ顆粒水和剤	2,000～3,000	7日	4回	アミスルブロム シモキサニル	● ○	予防治療	—	—	—
プロポーズ顆粒水和剤	750～1,000	7日	5回	ベンチアバリカルブイソプロピル TPN	○ ×	予防治療	1,000	—	750～1,000
エキナイン顆粒水和剤	2,000	7日	3回	ベンチアバリカルブイソプロピル シモキサニル	△ ○	予防治療	—	—	—
フロンサイド SC	1,000～2,000	7日	4回	フルアジナム	×	予防	2,000	1,000	1,000
ランマンフロアブル	1,000～2,000	7日	4回	シアゾファミド	●	予防	—	—	1,500
レーバスフロアブル	1,500	7日	2回	マンジプロパミド	●	予防治療	—	—	1,500
ライメイフロアブル	2,000～3,000	7日	4回	アミスルブロム	●	予防	—	—	2,000～3,000

※ ○：浸透移行性が認められる ●：浸透性のみ認められる △：浸透移行性が認められるが強い ×：認められない

※ 薬剤名が異なっても、成分（分類）が同じ場合は連用を避ける

※ シモキサニルを含む剤の総使用回数は合計4回まで

※ アミスルブロムを含む剤の総使用回数は植付後4回まで

※ ベンチアバリカルブイソプロピルを含む剤の総使用回数は5回まで

## （2）軟腐病の防除

軟腐病は高温多湿な条件で発生が多く、茎葉の過繁茂や、倒伏により多発します。

初期防除の徹底に心がけ、生育量に応じて散布水量を調節しましょう。

表3 軟腐病の防除薬剤例

農薬名	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	回数（以内）	系統名	浸透移行性	効果の発現
バクテサイド水和剤	750～1,000	7日	5回	グリシトキサクリン/ストレプトマイシン水酸化第二銅	○/○ ×	予防治療
マテリーナ水和剤	1,000	7日	3回	ストレプトマイシン グリコニック酸	○ △	予防治療
カスミンボルドー	500～800	7日	3回	塩基性塩化銅 カスガマイシン	×	予防治療
バイオキーパー水和剤	1,000	発病前～発病初期	—	非病原性エルビニオ・加トホーラ	×	予防
スターナ水和剤	1,000	7日	5回	オキシリニック酸※	△	予防治療

※オキシリニック酸に対する低感受性菌が出現している地域がある。オキシリニック酸を含む剤は合計5回までとし、連用は避ける。

※ストレプトマイシンの総使用回数は5回以内（種いも消毒含む）。

## （3）アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウの防除

特に林地、防風林近くで発生に注意し害虫の発生状況に応じて防除を実施してください。

表4 アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウの防除薬剤例

薬剤名	分類	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)	対象害虫		
					アブラムシ類※	オオニジュウヤホシテントウ	ナストビハムシ
デナポン水和剤50	カーバメート	1,000	7日	3回	◎(ワタ)	○	
モスピランSL液剤	ネオニコチノイド	4,000	7日	3回	◎(ワタ)	◎	◎
ゲットアウトWDG	ピレスロイド	2,000~3,000	7日	4回	◎ (ジャガ/モモ)		◎
アクタラ顆粒水溶剤	ネオニコチノイド	2,000~3,000	14日	3回	◎ (ジャガ/ワタ)	○	◎
ペイオフME液剤	ピレスロイド	1,000~2,000	7日	4回	◎ (ジャガ/ワタ)	◎	○
アドマイヤー顆粒水和剤	ネオニコチノイド	5,000~15,000	14日	2回	◎ (ジャガ/モモ/ワタ)	◎	
モベントフロアブル	テトロン酸	4,000	7日	3回	◎(ワタ)		
ウララDF	同翅目摂食阻害剤	2,000~4,000	7日	2回	◎ (ジャガ/モモ/ワタ)		
コルト顆粒水和剤	ピリフルキナゾン	4,000~6,000	前日	3回	◎ (ジャガ/モモ/ワタ)		

※ワタ・・・ワタアブラムシ、ジャガ・・・ジャガイモヒゲナガアブラムシ、モモ・・・モモアカアブラムシ

※◎は登録があり、道ガイドに掲載されているもの。○は登録があるもの。

### 3 豆 類

#### (1) 大豆のべと病防除

「いわいくろ」以外の品種はべと病抵抗性があるので防除は不要です。

開花始に上位葉(上から見る事ができる葉)を確認し、品種に合わせて適正に防除をしましょう。

【べと病の要防除水準】

##### ○黒大豆

開花2~3週間前に要防除水準に達した場合→要防除水準に達した時期とその2~3週間後の2回防除。

開花始に要防除水準に達していない場合→開花期1回防除が必要

表5 大豆べと病の防除薬剤例

薬剤名	成分または分類	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)
プロポーズ顆粒水和剤	CAA、TPN	1,000	21日	2回
フェスティバルC水和剤	CAA、無機銅	600	7日	3回

#### (2) 大豆の菌核病防除

開花始後10~15日目に第1回散布をし、2回目以降は発生状況に応じて10日毎に

防除しましょう。

表6 大豆菌核病の防除薬剤例

薬剤名	成分または分類	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)	備考
トップジンM水和剤	チオファネートメチル	700～1,000	14日	4回	
スミレックス水和剤	ジカルボキシミド	1,000～1,500	21日	4回	
ファンタジスタ顆粒水和剤	QoI	2,000	7日	3回	紫斑病に3000倍で登録あり

### (3) 小豆・菜豆の病害虫防除

#### ア 炭そ病の防除(小豆・菜豆)

7月からの多雨・多湿時に発病が多くなります。ほ場を良く観察し、発生初期から防除に努めましょう(表7)。※「雪手亡」「絹てぼう」は抵抗性があるため防除不要

#### イ 菌核病、灰色かび病の防除(小豆・菜豆)

開花後に曇雨天が続くと発病しやすくなります。ほ場の生育に合わせて、適期防除に努めてください。

#### ◎ 小豆防除適期

- 1回目：開花始後7～10日目
- 2回目：1回目防除の10日後

#### ◎ 菜豆防除適期

- 1回目：開花始後5～7日目
- 2回目：1回目防除の10日後

表7 小豆・菜豆 菌核病、灰色かび病を中心とした防除薬剤

薬剤名	成分または系統名	使用濃度(倍)		使用時期(収穫前)	使用回数(以内)	炭そ病(倍)
ブロードワン顆粒水和剤※1	チオファネートメチル メパニピリム	1,000		14日	4回	○
プライア水和剤	ジエトフェンカルブ ベノミル	1,000		14日	4回	○
ファンタジスタ顆粒水和剤	QoI	2,000		7日	3回	○
フロンサイドSC	フルアジナム	1,000		【小豆】21日 【菜豆】7日	3回	1,000～2,000
スミレックス水和剤	ジカルボキシミド	菌核病	灰色かび病	21日	2回	—
		小豆 1,000～1,500	1,000			
オルフィンフロアブル	SDHI	2,000		7日	3回	—
トップジンM水和剤※1	チオファネートメチル	菌核病 700～1,000 輪紋病 1,000※2		【小豆】14日 【菜豆】7日	4回	【小豆】1,000 【菜豆】

						700~1,000
--	--	--	--	--	--	-----------

※1 ブロードワン顆粒水和剤、トップジンM水和剤はチオファネートメチルを含むので、総使用回数は、は種後4回以内です。

※2 菜豆には登録無し

オ アブラムシ類・アズキノメイガ・ダニ防除（小豆）

本年の予報ではアズキノメイガの発生量は「並」、マメアブラムシの発生は「やや多」となっています（北海道病害虫防除所6月28日発表）。アズキノメイガは開花始の7~10日後に薬剤散布を行ってください。

表8 小豆のアブラムシ類・アズキノメイガ・ダニ防除薬剤例

薬剤名	成分または系統名	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)	アブラムシ類	アズキノメイガ	ナミハダニ
アドマイヤー顆粒水和剤	ネオニコチノイド	10,000	30日	2回	○		
ウララDF	同翅目摂食阻害剤	4,000	7日	2回	○		
モスピランSL液剤	ネオニコチノイド	2,000~4,000	14日	3回	○	2,000倍	
ゲットアウトWDG	ピレスロイド	3,000	7日	3回	○	○	
ペイオフME液剤	ピレスロイド	2,000	7日	3回	○	○	
スミチオン乳剤	有機リン	1,000	21日	4回	○	○	
ダニトロンフロアブル	MET I	1,000~2,000	7日	1回			○

## 4 てんさい

生育は平年より4日進んでいます。ほ場を良く観察し病害虫の発生に応じた適期防除に努めてください。

### 1 褐斑病の防除

褐斑病は前作または前年隣接ほ場で罹病残渣をすき込んだ場合、初発が早まり被害が広がる恐れがあります。ほ場の発病状況を確認し発生初期には遅れずに防除します。

また、DMI剤およびカスガマイシン剤は道内で広く耐性菌の発生が確認されています。可能な限り使用回数を低減してください。また、DMI剤はマンゼブ剤と同時に使用しましょう。

表9 褐斑病防除例

薬剤名	分類又は成分名	使用濃度(倍)	浸透移行性	薬剤特性	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)
グリーンダイセンM水和剤	マンゼブ	500	×	予	21日	5回
ホクガード乳剤	DMI	1,000~1,500	○	予治	14日	2回
どさんこスター水和剤	DMI マンゼブ	2,000~3,000	○ ×	予治	21日	4回

カスミンボルドー	無機銅 カスガマイシン	800～ 1,000	× ○	予治	7日	5回
----------	----------------	---------------	--------	----	----	----

\* マンゼブを含む剤の総使用回数は5回まで

## 2 アブラムシ類・ヨトウガの防除

別系統剤による輪番防除を実施し、連用とならないよう予防防除を実施しましょう。また8月中旬以降の発生状況により薬剤処理回数の削減を検討しましょう。ヨトウガは幼虫が大きくなるにつれて薬剤の効果が低減しますので、食害を確認したら速やかに防除しましょう。

表 10 ヨトウガ防除例

薬剤名	分類又は成分名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
オルトラン水和剤	有機リン	1,000～1,500	45日	3回
トクチオン乳剤	有機リン	1,000～1,500	30日	2回
カスケード乳剤	IGR	4,000	7日	4回
マッチ乳剤	IGR	3,000	14日	2回
ベジホン乳剤	有機リン 合成ピレスロイド	1,000～2,000	21日	4回
ゲットアウトWDG	合成ピレスロイド	2,000～3,000	14日	4回
ペイオフME液剤	合成ピレスロイド	1,000～2,000	14日	4回

表 11 アブラムシの防除薬剤例

農薬名	系統名	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	回数(以内)
リーズン顆粒水和剤	ネオニコチノイド	3,000	14日	2回
ダントツ水溶剤	ネオニコチノイド	2,000～4,000	14日	3回
アクタラ顆粒水溶剤	ネオニコチノイド	3,000	7日	3回
モスピランSL液剤	ネオニコチノイド	4,000	3日	3回

## 3 葉腐病の防除

葉腐病は高温多湿条件で多発します。発生が見られたら直ちに防除を行ってください。

表 12 葉腐病の防除薬剤例

薬剤名	分類又は 成分名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
モンセレン顆粒水和剤	フェニルウレア	1,000	30日前	4回※
リンバー顆粒水和剤	SDHI	4,000	7日前	3回
モンカットフロアブル 40	SDHI	1,000	14日前	4回

※育苗中を含む。

★農薬散布において、「農薬の安全使用基準」を遵守し、散布の高さを低くし周辺作物への飛散防止に努めましょう。

★散布時は、必ず防除用マスクを身に付け、肌をしっかりと覆うようにしましょう。

散布が終わったら、肌の露出部を良く洗い、うがいをしましょう。

★作業機の連結時での「挟まれ」事故や「機械昇降時の落下」事故に、十分注意しましょう。

★水分と塩分をしっかりとり、熱中症に注意しましょう